

荒木貞夫の口述記録

——満洲事変について（続）——

矢野 真太郎

東洋文庫近代中国研究班が保存する音声資料「荒木貞夫の口述記録」のうち、満洲事変に関する記録（全133分）の後半59分のテキストを公開する。音声資料の詳細については、前半74分を収載した本誌43号（2021年3月、65-106頁）を参照されたい。

テキスト化に際しては、前編と同様に、矢野真太郎が文字起こしを担当し、その後、久保亨、松重充浩、瀧下彩子、相原佳之、関智英、矢野真太郎が音声確認と校訂作業を行った。

凡例：・「araki…」はリール番号を示す。

・（ ）は補足説明，[]は文意が通るように語句を補ったことを示す。

本文

araki 58 0312 II_A（続）

荒木：それで考えたんですね。[1934年1月]18日とか、19、20、21日に。22日が議会なんです（実際には1月23日に第65議会が再開）。前の計画（五相会議で国策を決定し、それを次の議会で提示するという計画）は到底できないです。議会が始まっちゃったら、もう[計画は]おじゃんになる。そこでどうしようかと。しかし、昼夜兼行でやって、議会が始まってからも良いから、院内閣議を開いて、そこでバタバタと決定してしまって、最初の議会の終わるまでに、重要な時期の、予算が終わるまでですね、までの間にこれをやれば良いじゃないかと。しかし、一番大事なものは最

初の10日間。総括質問、これが大事で、これをもってだいたい空気が決定すると。やろうか、やるまいか、と考えたときに、3分で脳貧血。昼夜兼行というのは難しいと。さて、どうしたら良いかと悩んで、自分の側近やなんか聞いたんですけど。私今考えてみると、やった方が良かったんですよね。たいしたことない。ずんずんずんずん治ったんですよ。

衛藤：そうですか。はあ。

荒木：そこで聞いたら、「生命が本だから変なことをして倒れたら、それっすりじゃないか」と。何も告訴から逃げるわけじゃないから、むしろ静養の方をとった方が良いという議論です。これは当然です、近親関係はね、知っている者は。それから色々考えましたが、「それじゃあそうしよう（静養しよう）」と。しかし、「その後を継いでやってくれないか」と。「誰か」と。すると、あの頃でそういうことを若干薄々知っており、相談もした者は教育総監です。林銑十郎。その前、3月ばかり前は参謀次長、真崎〔甚三郎〕。他の手合いは、言ったってわかりもしなきゃ、申し送りもできません。で、この二人の方は前からよく、改革派同志なんていうような話もしとって。林君は実は変わっとったんですよ。私は気づいたんですがね。あれは浅原健三¹⁾がすっかり引っかき回しちゃって。

衛藤：ああ、そうですね。

荒木：石原〔莞爾〕と一緒にね。つまり、林内閣ができるときの騒動でよく分かりましょう²⁾。それで、林君に「君、僕の後をやってくれんか」と、教育総監。で、「これこれこの方針で、そうしたらもう申し送りせんでも僕はすぐに転地に行く」と。「医者とは2月の15日、1ヶ月半経てばもうよろしいというか、その間だけは転地にするから、出てきたらすぐ手伝うから、後を引き受けてくれないか」と。そうしたら、林は「できない」って言ったんです。「僕はこんな内閣入るとすぐに潰しちゃう」と。林君、何を〔言うか〕。今考えてみると、浅原ですよ。「それじゃあ困るんだ」と。「それじゃあ真崎はどうだ」と。「良かろう」と。「真崎のところに行って話してくる」と。僕は行けないからできない。

それで、真崎の所に行ったら、ところが真崎は別に否定も肯定もしない、そのとき。当たり前ですよ。そんなこと言われて、決定するならともかく、俺がそれじゃあ引き受けたとは言えない。「僕から言う限りで

はないから、三長官の決定に待つようにしとかなないと」という返事だった。「それなら受ける」と。「それじゃあ真崎に決定しよう」と。真崎に決定したわけだ。

残るのはもう一人、三長官の一つ、宮さん（閑院宮載仁親王）³⁾です。宮さんのところに林が行ってくれたから、宮さんが「不同意」ときたんです⁴⁾。そんなことないんですよ、宮さん。私はもうずっと宮さんにも申し上げたのに。こいつはちょっとですよ。言っちゃってね。それから翌日さらに、陸軍大臣が病床で寝とって上がれないから、陸軍次官を代理に出すから、陸軍次官と教育総監と二人でもって、もう一回それを閑院宮様に言ってくれと。

衛藤：柳川 [平助]⁵⁾ 次官。

荒木：柳川。そのときも柳川が言った報告の言うところは、林君の方から何も言わんのですね。すごくその点がおかしいという点、後から考えればね。あのときは皇道派、統制派なんて声が出とったでしょ。その怪文書が出てます。その表をね、閑院宮様は統制派という風に入っている⁶⁾。

衛藤：ああ、そうですか。なるほど。

荒木：それを殿下にご覧に入れて。「陸軍は実はこんな風でございます」とか。こう言って話したっていうんです。それで柳川が見かねて、「殿下それは怪文書でございまして、本当のものじゃございません」と。事実はまだ非常に違ってるんですよ。たくさんね。そんなことがあるから真崎に対しては、どっかがつついたか知らんですけど、参謀次長やとったですからね。ご裁可がなきゃならん。[しかし、それを] 断る。なんと申し上げても断る。

衛藤：つまり、皇道派の巨魁ならば困ると。そういうわけでございますね。

荒木：そう。それで、「御不同意だ」と。帰ってきたんですよ。それで今度、「案はもうこれ一切白紙に戻して。私も死ぬまでやる」と。「しからずんばもう他に道がないんだ」と。「しからずんば林がやってくればよろしい」と。「お前（林）はいけないと言い、そして真崎には御不同意だというなら、僕がやる」と。「倒れるまでやる」と。「どんなことになるかわからんけども、まあご覧じろ」と言っただけで林が引き受

けるという風になっちゃった。それじゃあ、案は一つしかない。「君のあとに真崎を持ってくる」と。「君と真崎というのは意見が一致しておる」と。「交友もあるんだから。そんなら僕が知っているから安心して行く」と。「二人がやってくれる。教育総監と陸軍大臣が同じなら良いじゃないか」と。それでもうすぐに結局、「殿下に申し上げてくる」と。「もしそれが御不同意というならば、もう一切白紙にして、私が自分でやる」と。「もうこれは一切流す」と。と言ったら、なんてことない、[閑院宮は]「よし」と。それが、私が起き上がった18、19、20日です⁷⁾。

それで、国会が23日から始まる。22日だったけど一日延びたんじゃない、この関係で。それで、注文をして、それまでに親任式を済ましておいて、最初の総理の施政演説を聞いて、そこで[信任状を]持って行かにか力がないと。だから、陸軍大臣は第一回の総理の演説までに親任式を終えていただきたいと。そのとき、なかなか手続きもあるものですからね。国会の開設の朝、親任式。その親任式が終わるとすぐに国会に臨んでいくと。これで私は安心して、熱海に行ったんです。

衛藤：ご静養のために。

荒木：ええ。そのときに行ってみたら、ぐんぐんぐんぐん治っちゃってね。一週間も経つときには、富士山の神社の階段をどんどん上がったり降りたりもできるようになって。それでもしかし、医者はいますけどね。

その間に情報をだんだん聞くと、一向に議会はだめでしょ。最初は足利尊氏論でもってね。中島久万吉⁸⁾が辞めるとかね。くだらない話。「尊氏があれば義勇なら、私なんかがおったら火を付ける」と。「なら俺は足利尊氏の礼賛論をしたことがある」と。かつて古いときに。「それがどこが悪いんだ」と。「ちょうど良い問題だと私は思う」と。私も当然「こうやって答弁しなさい」と。「まさに自分は尊氏の礼賛をした」と。「これはすべてじゃない。尊氏の良いところを礼賛したんだ」と。「人間はみんな欠点と長点があるんだから、長所を学ぶということは当然ですよ。長所に対してこれを学べ」と。「しからずんば、もし皇旨に抗したということで駄句を唱えるならば、楠氏を詠んでも今更、[中島はやはり]逆賊の大臣にはかならんことになるじゃないか」と。「そうじゃない」と。「由井正雪といえども大塩平八郎といえども石川五右衛門といえども、すべてが悪魔じゃない」と。「明智光秀もあれだけの善政をやっている」

と。「その良いことはとれ」と。ただし、「尊氏に対しての順逆の道については許すべからざる逆賊とする」と。「その点は間違いないんだ」と。「それを論じたんじゃないんだ」と。「尊氏の人物論をしたんだ」と。「その長所を言ったのが、必ずしも尊氏の順逆の逆に同意したわけではないということの良いんじゃないか」と。「たくさん例がいくらでもそんなことはあるから言った」と。そして、同時にちょうど順逆の問題が出るから、「さて今や大改革をせにゃならん」と。「順逆だけはいけない」と。ここでもって若干日本の国体観というものを述べて、「逆は許さない」と。「如何にどんな優秀な人間といえども、逆は許さん」と。「こう言っちまえば良いじゃないですか」と言ったんですがね、後から。それから〔中島は〕辞めたでしょ。

それで、まもなくしている間に、鳩山〔一郎〕⁹⁾君が樺工事件で叩かれて、それでまた辞めたでしょ。二人の閣僚が国会中に叩かれて辞めますよ。最後は帝人事件¹⁰⁾で三土〔忠造〕君、みんなが引っかかって、それでまあ〔斎藤〕内閣が潰れると。その間に小山事件があります。人違い小山¹¹⁾。

衛藤：それは知りません。

荒木：小山〔松吉〕¹²⁾法相が「危機感」とかいろんな種を出してやったんです。ところが小山違いなんです。それで相当司法大臣が傷つけられたことは傷つけられた。そんなようなことを言ったんです。

それから、行っている間に国策をやってくれると思ったら、それもやっとならん。それから、2月の15日に帰ってきたところが、何にもやっとならん。それから、私はもう林あたりを相手にしない。真崎に対しても快くならん。真崎に言ったらしいよ。「それじゃもう一回一切のことを白紙にして、前からやり直そう」と。そんなこと言っても、僕が横つちよから言っても、具合悪い。もっとも僕は辞表を出したときに、挨拶に行っていない。そのまま行ったんですから。ちょうどそれで帰ってきたときに、御所に行って記帳してご挨拶をする、非公式に。それから閣僚に会って挨拶をした。それでもって切れたわけです。その間のことですからね。

ということで、私はもうさじを投げたんです。どうせあれだけやっただめなんだと。林、相手にしとった林がその通り。そこで、今度は林が皇道派、統制派なんていうことでもって、永田〔鉄山〕¹³⁾に偏って、

とうとう事件をだんだんだん起こすようになっていきますからね。真崎の教育総監更迭問題¹⁴⁾。あるはずないのがいくのが、これはおかしいです、林として。これは私に向かってずいぶん言ったんですけどね、「何の思想も変わらなければ、意見も変わらないんだ」と。「けれども周りの者がおっては統制ができないというから辞める」と。「そんなこと言って陸軍大臣じゃないか」と。前、話したこともあるんですよ。最後の時にね¹⁵⁾。そして、それで私はもうさじを投げたんです。その間に、悪い床次 [竹二郎]¹⁶⁾ さんの五十万元事件¹⁷⁾ が出てきて、それから陸軍の広義国防のなんとかというパンフレットの問題が出た（『国防の本義とその強化の提唱』¹⁸⁾）。広義国防の。

衛藤：在郷軍人の。

荒木：いやいや陸軍省で。

衛藤：陸軍省パンフレットのなかの。

荒木：ええ。広義国防なんかなんてね。ちょっと経済が入ってる。その経済が統制経済ですよ、いわば。どっかにありますもんね。私のところにもあったかもしれませんが。この問題でもって、それで林君が国会でギャーギャー言われるから、「いや俺は自慢しているんじゃないんだ」と。「あれは一幕僚のやった [ことな] んだ」と。鈴木貞一¹⁹⁾ かなにかがやったんでしょ。やったんかなにかということだった。林君が見てちゃんと判を押しているんですよ。そういうことが [あった]。

それに次いでその次に来たものが、十一月事件です。士官学校事件²⁰⁾。辻 [政信]²¹⁾ なんざがガサガサやった。あの二・二六事件のときのやったんです（二・二六事件に関係することになる若手将校を取り締まった）。それで今度は、肅軍に関する意見書²²⁾。真崎教育総監の更迭。これらの人間の、若い将校の免官—これはできないんです。刑事問題なら良いんです。裁判なしでもって行政処分（将校の免官）はできないんです。

衛藤：それは習慣としてずっと。

荒木：いやその。身分保障をしていますよ。身分保障をしておるので、何にもないものを行政免官をしたり、行政でもって何かするということはですね、恩給の付くまでいけないんです。

衛藤：ああ、そうですね。

荒木：で、それ（行政免官）はまあ、やったと。それでもう「[[統制派が]

非合法するかと言うなら、俺らもまた非合法するぞ」と〔青年将校らが〕ギャーギャー騒ぎ出した。間が困っておるときに、横合いから何ら関係もない、誰にも関係のないですよ、相沢〔三郎〕²³⁾が出てきて、永田を斬ったと。〔陸軍内の統制が〕崩れたと。その後にもたそれをギャーギャーギャーやっている間に、第一師団がやがて満洲に行くのが〔1936年〕4月。「行ったらおしまいだ」と²⁴⁾。それでそれに先だってやって、二・二六事件。今、本（『日本を震撼させた四日間』）に出ている話をし、安藤〔輝三〕²⁵⁾あたりが非常に悩んだ筋書きが一番良い。安藤は同意していないんですよ。それは新井〔勲〕²⁶⁾君なんかがそう書いてますがね。私もよく知らないけど。新井君が書いたものには。新井君は参加していない。そんなことでもって、二・二六事件。これでもって最後、終わったんですけど。

その間に満洲はどうなってるか。さっきの一番最初の問題。それはなかの、かっこのなかに入りますかね（手もとのメモか）。すると、てんやわんやに出るといって、さっきお話したように。権力というものが一貫していないんです。関東軍司令官は変わるわ、陸軍大臣も変わるわ、総理大臣も彼等もみんな変わりますわね。その間にいろんな者が割り込んで入って行って、ついに彼等をして「王道楽土」ならぬ、「王道苦土」と言います。そして、「日満親善」と言うけども、その先に「日日親善」をやっているぐらいだから。あるいは「法匪」と言われたり。あそこの習慣を全部破壊してですね、自分の頭にもっとる経済学理か何かでやって。それで、満洲国皇帝も何か非常に、そう……²⁷⁾。しかし、物質的問題でぐーんと進んでいますからね。経済だろうが、鉄道だろうが、何だろうが、みんな数字的にはかーっと伸びている。それで私はもう非常に不満です。その一つの証明としては、〔昭和〕10年に、戦争の前ですね、あれが関東軍司令官でした。梅津〔美治郎〕²⁸⁾が。何年ですか。17年か16年ですか。

衛藤：じゃあもう、15年頃でございますね。

荒木：15年ですか。

衛藤：5年、6年頃ですね。

荒木：あの頃ですね。そのころに十年祭があったんです。十年記念式典が。満洲建国十年。

衛藤：それは昭和17年の3月ですね。

荒木：それにご招待が来たんです。私はお断りしたんです。内心で引掛かったんです。私は出席しません。

衛藤：ああ、そうですね。

荒木：「満洲国に対しては、私はお詫びもしなきゃならぬ、悔悟もしなきゃならぬ、弔意も表せねばならぬ。祝意は述べられん」と。「満洲、これだけのパンフレットを出して、いかにも満洲は進展したようだけれども、一番最初の「王道楽土」、「五族協和」はどこにあるか」と。「これが建国の本旨じゃないか」と。「これが満洲国を盛り立てていかなきゃならぬ。満洲国はどうした。[建国の本旨は]どこにあったんだ」と。「これ(建国の本旨)が一つもだめ[な状況]でもって、その後はどう伸びたろうと、経済が伸びたろうと、財政が伸びたろうと、そんなことは末節じゃないか」と。「ゆえに私が行けば、それに対して祝意じゃない」と。「抗議を申し込まなければならぬ。弔意も表せねばならぬから、私は行かん」と。それで、満洲に私は行きませんでした。で、国内[の式典]も一度も行ってらん。

衛藤：ああ、そうでございますか。

荒木：それは私の意図に反してそこに、もうこれはそれでだめなんです。[昭和]十七年は[大東亜]戦争²⁹⁾[は]もう始まっていますからね、とうとう。私は、そういうふうにいまだに(インタビュー当時)、それはもう公然と言い得るのは、そういうことをもって、自分のあれ(満洲国建国前後の荒木の判断と行動)が背景なしにね、勝手に前に同意しとった[のに]、後には都合の良いことを言う[と批判される]ということになる。実際、「残念だ」と。「理想の国家を作ると言ったのが、あたかも今になってみれば、まるで日本のわがままのような風に言われたじゃないか」と。しかし、実質においては、国としては形をぐんぐんなして、世界の13国が承認していますから³⁰⁾。もうしばらく経ったら、英米ももう利害関係の問題ですけど、英国なんかは実質的に認めていますからね。通商しようとかなんとか³¹⁾。だから曲がりなりにも、遅くともこの時期、大東亜戦争の始まる前ですね、支那事変の始める前にこれ(満洲国の基礎)を必ずしっかりしたものにして、済ますべき。同時に大東亜戦争に入るには、戦争前に朝鮮問題を片付けないといけないんです。大自治を与える必要

がある。あるいは朝鮮と、日韓両国の連邦にする必要がある。民族を同化できるもんじゃないです。彼には彼として。それが利害関係を共にしてやっていくところに、あそこを話さなければ、大東亜戦争の宣言は一つもこれは嘘です。

衛藤：生きてこないですね。

荒木：それがどうしてできなかったかと。他民族といいましても、それじゃあ同化政策で、姓なんか変えたでしょ。これは愚の〔骨頂で〕、本当に幼稚園の生徒の所業ですからね。できない問題。名前を変えてできるなんて、どのくらい害になったか分からない。台湾然りでしょ。誰が考え出したかと思ってね。私も知りませんが。朝鮮合邦のときに、私はそれを強く言うの。朝鮮合邦のときにも私は反対したんです。

衛藤：ああ、そうですか。

荒木：「一民族が決して一つに征服できるもんじゃない」と。「一つになったってだめだ」と。「かえって日本の弱体化になる」と。私は満洲、それは宇都宮太郎さんにね、にも私は意見を前に述べたことがある。宇都宮〔太郎〕³²⁾さんもアジアの復興問題で日華提携というような、その前に朝鮮に対して、非常に、日韓の提携問題を説いた人なんです。自分のところのあれに、朝鮮の貴族だった金応善（実際には貴族ではない）³³⁾を呼んで、宇都宮なんかという名前（宇都宮金吾）にして、それで日本の学校を卒業させて、後に李王（李垠）³⁴⁾さんの侍従武官です。

衛藤：ああ、そうですか。

荒木：そのくらいやとった。そんな話をして、私らもそうだ、こういうことだとなって。私がロシアにおける間に、日韓合邦ができて、通報がありました。すぐに私〔は〕手紙をやったんです。「なんたることですか」と。「吾人の日本も弱化することにこそなれ、強化になりません」と。それで、「どうしてあれをやらせました」と。〔宇都宮太郎は〕参謀本部の、そのときは第二部長くらいだったですか。そしたらもう、寺内〔正毅〕さんのときらしいですね、「寺内がやっちゃったんだし、しょうがないじゃないか」と。あとは「もう支那問題だ」と。「こういう間違いがないように、だましだましでいくしかない」という手紙がありました³⁵⁾。そこに日韓合邦のあれが来たでしょ、記念章が。相済まんことだという話はどうしたのって。「永久に恨みを彼（朝鮮側）に残すものじゃ

ないか」と。「日韓合併国辱記念章じゃないか」と、彼（朝鮮）から見れば。というようなことも言ったこともあるんです。

衛藤：ああ、そうですか。

荒木：これは将来の問題と、一民族というものが決して同化できるものじゃないですよ。無理な方途をやるから、ある時期には。今度の（インド関係の問題）も300年も経ってますかね、インドの独立も当然ですよ。それがかえって害になってしまうのではないかと。

それで、最初の問題に入れば、満洲国もそれで失敗して終わったと。これは政権を一つ長く続けておけば、ある程度できます。1年や2年でもって、指導が全部変わっていく。ああなってきて、その間には皆ね、バス乗り遅れを避ける組合はぐんぐん入って行って、新しい職に就きますから、めちゃくちゃに壊すんですな。それはやっぱり、強い力が一つあって、ギーっとある程度固めていけば済みますと。満洲は、私はそういう風に考えてますがね。満洲はとったところが、そのまままた日本のものにしようと思った。あそこに理想の国家ができれば、日満提携して、経済問題でも国防問題でも何でもできますから。で、国会でこういう、「満洲[国]のできたために、陸軍大臣はこれほど金使ってるじゃないか」と。「何の利益にならんじゃないか」と。こういうこともあったんです。これは国会議員のね。それから私は言ったんです。「満洲は弟にして、これから仕立てるんじゃないでしょうか。兄貴が寒いって言って、弟の羽織をとって自分が着て、弟がブルブル震えさせとって済みますか」と。「そのくらいは自分の着物を脱いでかけてやるんじゃないか」と。「今、支出が多い」と。「この弟が本当の一人前になるまでは、我々は支出が多くても良いんじゃないか」というんで、こいつ（質疑）を打ち切ったのでございます³⁶。

衛藤：ああ、そうですか。

荒木：国策はかくなきゃならんじゃないかと。殊に今日それは分かっていますからね。というような、満洲問題に対してそういうような感想を持っておってですね。

衛藤：そうですか。そうすると、閣下は昭和9年の正月、ご病気にならなければ、国策を決めて、そして外国とはずっと平和的な交渉をして、国際連盟脱退以前のような、ああいう半ばけんか腰のようなのはやめて

しまつて、そして満洲国をこうずっと育成していつて。

荒木：世界からあの国家を学べという風にまでもっていかなきゃならぬのですね。

衛藤：そうすると後に、実際そうなってしまいましたような、関東軍の独裁とか、それから満人の大官を全部ロボットにしてしまつて、日本人の官吏が影で操るとか、ああいうようなことは全然もう閣下のあれ（考え）からはもう離れてしまつたということなんですな。

荒木：しかし、一番最初の指導はね、これはある程度まで跋扈して引つ張つて行かなきゃだめですよ。崩れますから。それが今の気持ちをそこに持つか、自分のものにするという気持ちを持つかの心持ちの相違もつて、そういう結果というのは出てくるのではないかと。

衛藤：つまり、自分の利益のために操るのか、それとも。

荒木：人の利益のために、こちらが一つの指導を、手段として持つていふということがはっきりすれば、あえてあんなこともないんじゃないかと思ひますがね。

衛藤：ああ、そうなんですか。

荒木：それは石原にも最初はそういう理想を持つているんですからね。でも、ずっと続けていけないでしょ。内閣がいくつありましたか。

衛藤：大変なものでございますね。

荒木：犬養、斎藤、岡田、それから広田、林、宇垣流産もありましたね。それから、近衛第一次、その次に阿部、それから平沼、第二次近衛（実際の内閣は、第一次近衛、平沼、阿部、米内、第二次近衛の順）。それから……。

衛藤：第三次近衛。

荒木：東条。

衛藤：大変なものでございますね。

荒木：これだけのことをやつて、あれだけの間に、指導する、みんなご覧になれば、みんな頭が違つてます。

衛藤：なるほど。

荒木：だからできるはずがないと。だからこういう難関になつた時分にはですね、大嵐のなかには船長に一任せにやらないですよ。

衛藤：ああ、そうですね。

荒木：その船長によってこの嵐を切り抜けると。ある場合には船長は怒り飛ばして、水兵を殴り飛ばす。これはもう非常にあることですからね。その船長の行く方に行けば行きますがね。それから中間（どっちつかずなことの意）というやり方は、私はもうどうしてもできない。中間というやり方、どんなに良い中間でもね、その人がその中間を、その次に来た問題がその中間から起こってくる結果ですから。その頭を持たなきゃ、最初のやつをやった後でもって、それでまただめになりますから。やっぱりその人の曲がりなり、変なりにでも、その人の一貫した方針の方がまだ害が少ないと。

衛藤：なるほど。

荒木：で、もう決して中間なんざやって [もしようがない]。中間 [に] つくのは、もう本当に彼が信じて、事ごとに来るならば、ぴったりだったなら良いです。しからずして、いろんなことが中間自体にあった、我々は自分の責にあった……。

araki 58 0312 II_B

荒木：これを怒ってもだめだ。そういう世の中だということを今になって我々は気がつくのだが、気がついたらそれは後進の者に教えとかなきゃいかんですね。ある名士を立てなきゃなかなか出てこないです。なかなかその世の中の問題というものは難しいもので、だいたいでたらめですね、人の評なんて、時局の。それから論評家のいろんな評なんていうのは、でたらめですね。

我々も、自分のっていったらおかしいけども、よく。今度恩給問題が出たりしますよね（1953年に改正恩給法が施行され、いわゆる「軍人恩給」が復活する）。私に恩給のことを聞くんですよ。「どうか」と。私は「もう実は恩給を研究しとらん」と。「陸軍に出仕したときも恩給をもらってというのを考えたことないんだ」と。「そんなことでもって考えるなら、陸軍 [へ] 行きませんよ」と。「実は研究しとらんのだ」と。しかし、いろんな傷痕軍人やなにかありますからね。そういうものに対する救護の方法というものは、これは今では恩給というもので一言、「結構だ」と。こういうような話をこの間、あるところでやったら、実業界の人らしいんですが、それが「一体あなた方ね、軍人はね、この戦争をやって、こ

の戦争を負けたんだ」と。「だから今頃恩給やると言ったって、それはもう断るべきじゃないでしょうか」と。「荒木さん、あなたはこの戦争をずっとリードしてきたんだから、その勇気がありますか」、なんてこと [を聞くんです]。けれど私は、「恩給は最初っから考えておらんから、実はよく知らないんだ」と。けれども、「知らないから不必要とは言わない。必要でしょう」と。「私はそんなこと考えたこともない」と。それから、「この戦争に対しては、実は甚だ遺憾だけれども、大東亜戦争、支那事変から来るというのに、よく知らないんだ」と。「連携してなかったから。意見も相違しとったから。一切役職を、一つの役職も私は受けておりません」と。「おそらくは、私くらいだ」と、「自分でこのくらいだ」と……。翼賛会も青年団も [大日本] 政治会³⁷⁾にも一役もかっておらん」と。「全部まあ、そういうことだ」と。「意見が相違したらいかんと思ったからです」というようなことで、「実はこの戦争が良いの悪いのって私は知りません」と。こう言ったら、「おかしいですね」とこう突く。「あなた方が一体これをリードして、この東条を補佐してやったんじゃないですか」、なんて言うんですからね。そこから話にならないですよ。ものすごい「研究してください」と言うわけですけども、それはあんまり言えば、自分は弁明になりますからね。今日は。過去なら良いけれど。

だからまあ、考えるのは、吉田 [茂] 君と一緒に憲兵にもし捕まっとたら……。この間、吉田君に会ったら、「僕は捕まったものだから、とうとう総理大臣になったが」なんていう。あのときは実は一緒だったんです。そういうものですね。

衛藤：あのときとおっしゃるのは。

荒木：吉田が捕まった³⁸⁾。

衛藤：殖田俊吉³⁹⁾ や岩淵辰雄⁴⁰⁾ の。

荒木：ええ。

衛藤：ご連絡があったんでございますか。

荒木：ええ。連絡して。

衛藤：ああ、そうなんですか。

荒木：あれは裁判のちょっと前からね。近衛 [文麿] 公が心配して、「なんとかこれは早く集約しなければ」と。吉田君も当時近衛公と。それで

心配して。赤というものに対して、ギャーギャー言ったのは殖田俊吉ですね。一時あの統制経済の種本⁴¹⁾をもって。それからあれは岩淵君がその当時は同じような議論を。ということで色々研究を先生らがしたんですよ。

これが、私には非常に、自分でお詫びしなきゃならんことはたくさんあるんですがね。「なぜどンドンもっと勇気を起こしてやらないのか」というんですがね。これは日本の、東洋の教えですね。自分に関係しないときには、「その職にあらずんばその言を為さず」という言葉があります。「余計なこと言うもんじゃない」と。それが悪いんですかね。そうして「軍を押さなきゃならん」と。なんでも陛下の号令が……。軍なんていうのがびゅっとして動きはせんですよ。それを君側が知らないんですからね。「軍が怖い」と。「これを抑えるものは何か方法はないか」というので、東条内閣と「なった」。それで、宇垣勢力、それから我々の勢力、これが対立してると思っ取るのです。世間でもそう言っ取る。「これを一つにして当たれば良いじゃないか」と。こういう議論があいだに起きている。吉田君も私のところ来たことがあります。それから真崎は宇垣さんと会見していることもあるんです。それで私の所へ来たとするや、「候補は別なんだ」と。でも「やらないといけないとは言いません」と。だから、おやりになったら良いでしょうが、せつかくそれだけのやつが。「私はどれも全部お断りする」と。「だから、できるもんじゃない」と。できたって宇垣さんという人はあんまりよく知りすぎているから。どうも小畑〔敏四郎〕⁴²⁾君が。これも小畑のことは世間の人には知らないんで、私は今度書きますがね、ちょっとないですよ。

衛藤：大変な人らしゅうございますね。

荒木：見識を持ち、全く無欲ですから。名利はこのくらい恬淡として、ないです。そうしてそんなだって捨ててないですよ。必ず活動をしてその間「こうしな。ああしな」と。大東亜戦争が始まってから、もし作戦だけでもあれ（小畑）使ったたら、こんな戦しとらんですよ。

衛藤：そうですね。

荒木：戦争前にはもう既にあれ（小畑）は急所を押さえてるんですよ。「この計画ではだめだ」と。「船でもってひきます」と言った。それで、「こんな、計画し直さなきゃだめだ」と。「こんな甘いことでもって、決し

て戦争の遂行はいかない」と言ったんですがね、そのとき戦争を始めたんですよ。「できない」というようなことも言っておられました。

衛藤：そうですね。

荒木：彼は潔癖ですからね。嫌いだときたら、もう口きかないんですからね。最も良い例はね、自分の上官ですよ。参謀本部のどっかの課長のところですよ。片方のどっかの部長をやった、杉山 [元]⁴³⁾ がね。それで先生の部屋に来る作戦課長をやっとって、部長のことで。杉山が来たって、[小畑は] 椅子も立たなきゃ敬礼しないですよ。杉山が立って、部長が。何か言おうと、「ああそうですね」。こうやって行き会ったって決して敬礼しないんです。彼曰く、「杉山は軍人じゃなくてあれは商人ですから」。まあ、商人でもないんですけどね。「商人ですから、商人には敬礼しない」と、こう言うわけです。そのときも話したのが、「私は閣下のなにも部下でもないんだから、その問題の誰それにお話くださいと言われても」と突っぱねるんですけどね。だから永田と良い親友だったんですけど、後には割れちゃったのは、そこから来てるんです。国策から来たんです。結局のところ、陸軍の割れたのは国策から来てるんです。対ソ準備論と、対支なんていうか、征服論。

衛藤：膺懲論ですな。

荒木：「しかる後に日支提携して、ソ連にあたるべし」という。「そんなことはだめだ」と。「支那に足を突っ込んだら滅亡だ」と。これは作戦部におったものだけしかわかってない。作戦部におらないとわからない。[永田らは] ソ連に対して非常に甘いです。これはソ連に、第一次世界大戦にソ連に従軍した者でなかったら、意見は出てこない。

その二つが永田と小畑。片っぱは作戦部に、片っぱは陸軍師団。それがだんだん議論になってきて、永田が若干もうそうなってくると、小畑から言わせりゃ、「あれは名誉欲が強い」と。「だからだめだ」と。それで偉いところは、こういうときに小畑は永田と一緒に。永田もしかし有能な人間で、私 [は] 幼年学校のと時から知ってます。使い道のところの如何や。若干正義肌がありますからね。頭も良いんです。小畑と仲が良い。二人は本当に仲が良かったというくらい良いんですがね。彼等二人、大佐から進級した年、そして真崎の下で参謀本部に採るということになった。小畑は第一部出身。作戦部出身。彼は第一部長。永田は第二

部長。両方部長ということに案が決まったんです。これ（以下に述べられる小畑の配慮）は他の者にはできないです。小畑は「行きません」と。「永田は名誉欲が強いから、私が第一部長になって、永田が第二部長」。だから第一部長、第二部長って悪いことないです。参謀本部ではとにかく第一部というものが中心ですから、作戦が。第一部長には、まあ格が良いことになってるんです。「私が行っては、永田がすねてだめだから、私のご辞退する」と。むしろ「私は第三部に行く」と。船舶班に。これはまあ格がうんと下がるんです、行った人 [の格が]。だから「私は第三部に行く」と。「そのときは永田も満足しましょう。第一部長には誰か脇の人を持っていらっしやい」と。で、その通りにして、第一部長は確か、「古荘 [幹郎]⁴⁴⁾ が良い」と。それで、第二部長に永田が行って。第三部長に小畑が行って。

ところが、小畑、「しかし国策とか、重要な問題は、もう引きませんよ」と。そこで、船舶の問題が「これはだめだ」ということで通り、このときに作ったのが、神州丸⁴⁵⁾という船を作ったんです。極秘船ですよ。我々もとうとう、私が第一部長の時から出発した船ですから、見に行こうと思えば行けるけども、見たくてしょうがないと思いますかね、飛行機を分解せずに積める商船なんです。「上陸するとき、そんなもの組み立てとったら間に合わん」と。「船からすぐに飛ばす」と。それで海軍の方に言うと、「そんなものはいけません」と言います。「非常に無理がある」と。1万トンクラスの船ですからね。色々頼んで、こしらえるんで。神州丸という名前です。神^{かみ}の州と。戦争に沿って役に立ってますから。そんな船も作っています。それから、遠距離爆撃の重爆ですね。二台作ったんです。「もし万一のことがあって、アメリカと戦をするようになるならば、フィリピンはすぐに飛行機で攻撃移動せん」と。「そのためだ」と。それで「台湾からあっちへ飛べる飛行機を作らないといかん」と。今ではもう何でもありませんけど。「相当の期間にそうする」と。これは秘密機で、「研究機と号す」と。夕方だけ低空して飛行をしてやっと思った。それも小畑が発案だった⁴⁶⁾。そういう功績が [小畑には] たくさんあるんです。それで今も、そんなこと、するくらいちょっとできないですよ。自分の椅子を譲ってね。しかし、[第一部長の立場を譲って] やったけど、会議では [自らの主張を] 一步も譲らんでもって、ますますそう (対立

する)。そういうことで。

衛藤。ああ、そうですか。

荒木：だから、この戦争は、優位な人間を優位なところに使っていないということが弱点でしょうな。みんな能力あるんですから、我々が。「能力のところに、いわゆる人を見て能力のところに分配してあげるんだ」と。「それをとんちんかんに分配するからみんな殺すんだ」と。あれだってそうですよ、東条。使うところにいけば今度のようなことはないですからね、東条が。あれはあんまり公開してはいけないから話しませんけどね、東条があそこ（内閣総理大臣）に行ったのは、東条を信頼して行ったんじゃないですからね。東条をあつ位置に置いて、統帥と行政と両方いっぺんに彼に与えたのは。彼は言うでしょうね。話したいけども、それはまあいつかまた別のときに話しましょうかね。

衛藤：そうですか。

荒木：東条を殺したようなもんですよ。

衛藤：そうなんですか。

荒木：つまり、軍の横暴を抑えんとして軍に失敗させるということです。「自分でやってみたら失敗するだろう」と。「そうしたら分かるだろう」と。「そんならみんな政治でもなんでもやらしちまえよ」と。「失敗したらぎゃふんとそこでやれば良いじゃないか」と。

衛藤：それが元老達（重臣たちのことか）の考え方なんですか。

荒木：まあ、そうですね。

衛藤：ああ、そうですか。

荒木：直接あれから聞いたんだから間違いないですよ。近衛公から。

衛藤：ああ、そうですか。

荒木：それは私は「いかん」と言ったんですよ、近衛公に。そういうことを。だって人のものじゃないでしょ。自分のもので。壊れたらもう、茶碗の台無しは継げませんよ（茶碗の金継ぎを喩えに用いている）。

衛藤：そうですね。

荒木：「そんなことしちゃいかん」と言ったんですけど、これは〔近衛が〕「もう全く野にあって、発言権も〔なく〕、どこにも行かん」と。〔私は〕失礼と思ったんですけどね。そんな話を〔近衛は〕するんですよ。そんなことの累積が、結局こうきたんで、それから評論家を書くように、

「ああすれば [良かった], どうせい」とか書いてますがね, あんなあっさりしたもんでものが動いたんじゃないですからね。まあ, そんなようなこともあるんです。

衛藤: 今の話で林銑十郎氏がいつの間にか変わってしまっていたという, その背後に浅原健三や石原が。それはどういうことでございますか。

荒木: これはね, 私のはっきり分かったのはね, 杉田省吾⁴⁷⁾ というね, 二・二六事件に関係して, 刑を受けた浪人がおります。元左翼ですね。杉田省吾と言います。真面目な, もう男は男ですね。あっ, そうそうなんていうか, 別に深い考えはないですと。それが来てすっかり聞いたのが, なるほどと思うたですね。その表面に現れた例が, 「浅原と石原, 林銑十郎氏を押し出す」と。それは「浅原経済を実行する」と。それでちゃんと計画して広田内閣を倒したでしょ。ところがどっこいしょと, [大命が] 宇垣 [一成] さんに行ったんですよ。それで, 石原が陣頭に立って, 宇垣流産に持って行って。「あとどうしたら良いか」と。「それは林でなきゃいかん」と。それで林に大命降下した。それでも新規はいるわけで, これをもって林が, 浅原, 石原のお献立の, 人ですからね, 「閣僚メンバーで行こう」と。それで, 閣僚メンバーを元老に見せた。元老から否認された (実際には板垣征四郎陸相案を梅津美治郎陸軍次官らから否認された)。それでやめるか, 元老の意見に従って浅原に組閣の負担にする。そうなるとおせっかいがたくさんおましてね, 周りから, 「組閣しまえ, 後はどうとでもなる」と言うんで。あのときのだから閣僚はね, 皆名前の良い閣僚ばかりが出てますよ, 元老陣 [にとって]。例えば, 陸軍大臣, 杉山でしょ。海軍大臣, 米内 [光政] でしょ。米内は, 私よく知ってます。いろんな場合に, 政治家でもなきゃ, 素人でもないですけどね。彼には彼の長所があります。それから, あとは同県 (石川県) の永井柳太郎 (実際には林内閣に入閣していない)⁴⁸⁾。それから大蔵省は結城豊太郎⁴⁹⁾。これは内閣の前の関係で。そしてあのときは少数内閣で, みんな兼任ですよ, ほとんど。一人でもってほしい二役買ってます。そして, 近衛さんの代表として入った河原田稼吉⁵⁰⁾。それから平沼 [騏一郎] さんの代表として入ったのが塩野 [季彦]⁵¹⁾。こういう内閣です。したがって政務次官は作らない。参政官みたいな, たった一人政務官を一人置いて, 少数内閣。それはしかし変体になってからですよ。だって

石原とあれ（浅原）とは怒っちゃった。組閣中にあそこ（組閣本部）談判に行ってますよね。これは新聞にも出たし、まあ何かにも書いてあります。違うじゃないかと言って。憲兵がずっと「待って」をやっとって、彼（浅原）がいる前で。それで彼のメンバーを全部抜いて、今の生ぬるい臨時メンバーにして、まとめていって。さあ、右翼が色々突っついて、注文を出す。両方の注文を入れて話し合っていたんだが、食い逃げ解散まで行ったんです。

衛藤：ああ、そうですか。

荒木：解散するなら解散する方をとれば良い。

衛藤：つまりその発端では、つまり林銑十郎氏が浅原氏あたりの考え方に鞍替えしてしまっ、その閣下の国防計画を総合的に推進するというそちらの方を見捨ててしまったと。

荒木：そのときから我々の方に興味なかったですね。私が辞任するときの今の話をすればお分かりになる通り。「俺はこれをやるならこの内閣を潰す」と来たんですからね。林君からそんな言葉が出るはずないんです。それはもう極めて微温な人ですからね。なんでこれが分かるって、後になって今の林内閣ができたときに浅原が出かけていって、まあ石原と一緒に怒鳴り込みに行ったでしょ。「違うじゃないか」と。で、あのとき今の十河〔信二〕⁵²⁾君が、書記官長の、あれも革新の方ですからね、最初放送したんですよ、一日。組閣幕僚で。それで変わっちゃって。で、あと誰ですか。変わると同時に、放送も変わってしまったんですよ。それで十河君なんかも引っ込んで。誰でしたかね、あと。官僚ですよ、書記官長になった、誰でしたっけね。遠藤柳作⁵³⁾の代替わりになったですけどね⁵⁴⁾。それからその杉田の話は、「その計画を林さんに全部見せた」と。それで意見を言ったら、「林君が全面的に同意した」と。そこで林を「それじゃあ押し出そう」というんで、いったと。これは杉田省吾という、今〔は〕死んだんですけど、二・二六事件の、参加して、それ（杉田省吾）の話です。それで私がそうだと。そうすると思ひ起こされるのが、我々が辞めるとき、なんとなく割り切れないんですよ。

衛藤：なるほど。そうですか。

荒木：何だということになれば、やっぱりそういうからくりが後ろでもうちゃんと。

衛藤：できてた。

荒木：やっと思った。

衛藤：ああ、そうですか。

荒木：だから浅原健三に、あれは、なんでしょう、今生きてやっていますよね。あの、石原も、それから板垣〔征四郎〕も、全部これとの関係があって。後に浅原の問題が起こったときには、板垣はしきりとなんとかかんとか言われて、あれも大臣のときでしたかな、そのときは⁵⁵⁾。そういうことが、これは後に分かったんです。

衛藤：そうですか。

荒木：詳細のことは今の杉田省吾の話を、「なるほどそれならば辞めよう」と思ったんですね。そこで、食い逃げ内閣が終わったから、「嫌だ」という近衛公にまた大命降下したと。近衛公は「まだ自分は政権の座に就くことはできない」と。だから、二回の大命降下ですよ。二・二六事件の後に大命があったんです。ところが、病気の故をもつてご辞退したと。それで、彼が私に話したのは、「陸軍に相談相手が一人もいなくなった」と。「みんな辞めちゃった」と。だから、「今まではともかく、陸軍というものに対する処置をしなきゃならない」と。で、「ご辞退した」と言っと思ったです。ちょうど私辞めて（予備役編入）、二・二六事件の後辞めて、すぐに行って、挨拶に行ったときは〔近衛は〕病気で寝とったんですね。彼はこの局面を直すには三年以上も……。〔数語不明〕そういうことなんですね。

衛藤：そうですか。ちょっと遡りますけども、大臣になられてすぐ三月事件が、小磯〔国昭陸軍省軍務〕局長あたりの。三月事件とそれからその後の十月事件、これの処分については、もうお考えになりませんでしたか。

荒木：私はね、これは一瞬で、小畑のことだから、潔癖ですから、全部掃除しまいと。

衛藤：小畑敏四郎氏がそのとき作戦〔課長〕。

荒木：そのときはまだ陸大の教官です。

衛藤：ああ、そうですか。

荒木：作戦課長から陸大の教官に代わっておつて。

衛藤：ああ、そうですか。

荒木：それで作戦課長には、今の今村均⁵⁶⁾が来た。そして第一次上海事変におつかった。それでこの問題は、さっきお話があったように、これはもう小畑の特殊、特別に記載すべき功績ですね。

衛藤：敵前上陸でございますか。

荒木：敵前上陸です。そこで仕方がないんで、「これは〔戦況、作戦地域などを〕とてもよく知っとかなきゃいかん」と〔私は考えた〕。彼（小畑）は陸軍大学の〔教官〕ですからね。今、にわかでしょ、一月から〔上海事変が勃発して〕。「作戦課長どうしても、あれしないといかん」と。専念された、前から事情を知っとるのか。当然、知らなかった。代わって間もないんです。目の前（今村均）にははなはだ済まんけども、「これは大義一新を目指すしかないんじゃないか」と。これから戦が拡大していったら、本当に大戦争になりますよね。すぐに行かなきゃならん。これは海軍の要望において海軍の援護を頼む。ところが、皆はこれを待ってるんですからね。そこで「やらねばならぬ」と。それには作戦の問題として、今村君も良いけども、今村君まだ〔参謀本部作戦課に〕いて間もないです。かつては行っておらないです。第一部にはおらない。そこで〔小畑〕先生、あれについて行ってたんです、白川〔義則〕⁵⁷⁾さんに。〔上海派遣〕軍司令官に。できましたからね。その前に白川君について作戦。そしていろんな案が、批判が出ると思ったんですけど、それは目をつぶって、小畑をさらに第二課長に選んだ。作戦課長に。それで、小畑に「大方針はこうだ」と、「戦争に至らしめないように、速やかに解決、全部引き上げるんだ」と。而して「日本がこれをやったということの品位というものを明らかにする」と。「これを土台としての作戦を作るんだ」と。その答解として出てきたのが、「七了口⁵⁸⁾を使う」と。私は忘れとったんですがね、私が第一部の頃に偵察はしてあるんです。

衛藤：ああ、そうですか。

荒木：あれを使おうと思って。言ったら、陸軍大臣のところに相談に来る必要はないんですよ。参謀本部ですから。ところが真崎が来たばかりでしょ。真崎も作戦部にいない。あれは教育総監部。それから陸軍省です。陸軍省で軍事課長になったんですけど。そういうことで、したんです。で、やったときに七了口の問題。それで非常に計画は大きいんです。「二個師団出さなきゃならん。それから兵器弾薬をしっかり積み上げ

にゃ、一切の局地活動は任した」と。それは結果が良かったから、今でも「良かった」と言えるんですけど。それで小畑の班と、そこは作戦部でしょ。小畑としては「うまくいかんかもしれん」と。それは「南京まで行かにならんかもしれん」と。「南京を衝かなきゃ収まらんかもしれん」と。「蒋介石の軍隊が入ってくりゃ、その南京攻略前の準備だけはしとかにゃいかん」と。世に出すと相当の弾薬をやる。それに足をつけにゃならん。軍はご承知の通り、兵站がついて行かなきゃ旅行できないんです。海軍がそれを知らないもんですからね。何、陸戦隊とやるとき、ひょっと行って前に出られないんですからね。食ってもいかなきゃ補給も付かない。大行李も持たなきゃ、輜重も持たなきゃ、兵站もなきゃ、力量は違いますからね。海軍は船でがーっと行って、そんなことなんて必要ない。ということで、その用意として、すなわちそうじゃないと私は二個師団出した一個師団のときは本当の動員をしたんです。輜重も兵站もくっついていく。第十四師団、宇都宮師団。それで片っぱは押っ取り刀で行かなきゃもう危ないですから。陸戦隊全滅というんで。それで最初の師団は四国（善通寺）師団（第十一師団）。一番近い。あれから船に乗せて、さあーっと行けば、24時間で行けますからね。それであれを「そのまま出す」と。「それで第十四師団はしっかり動員をしていく」と。「これは遅く行く」と。それからあっちに行くのは、銃砲をです、旅順からあそこに運んでますよ、上海へ。それから弾をうんとあそこに積んだ。こんな余っちゃったんですがね。それから大蔵省や何かから言わすと、「それだから金が要って困るんだ」という。大蔵省の案をやりゃあ、今の地域が広がらん代わりに、ずっと [時間が] 延びてくる方に。

衛藤：なるほど。

荒木：拡大が拡大になるわけだ。それだけの準備をした。それでまあご承知のように、上陸3日目に片付いたんです。戦死者二人です。工兵と中尉一人と。工兵と兵隊一人だけで。それでもうぐうっと3日目には休戦ですよ。上陸して3日目にこういふことで、後の第十四師団は少し動員が遅れて、航海途中に一切は済んだと。それでまあ、何人かの朝鮮人にやられて、民団長は死に、白川さん、野村 [吉三郎]⁵⁹⁾。

衛藤：重光 [葵] 総領事 (実際には駐華公使)。

荒木：重光。あれがみんなけがした。4月の29日でしたかね。

衛藤：そうです。天長節。

荒木：天長節でしたね。上海は今、談判をしている間ですね、休戦の。もうこれは良かったのはですね、向こうのやつが干渉して入ってきたんですよ。「オブザーバーに入れて欲しい」と。外国各国のやつらが。それは、上海の治安維持ですからね、目的は。最後に皆彼等は判を押しました。それで「発言権だけは持っておる」と。けれども彼等はね、自分が責任を負うのは嫌ですよ。日本の軍隊がここに駐屯しとりゃあ、日本軍の方でやるんだから、それで「発言権だけ持とう」と。全部引き上げちゃったでしょ。ちょっと肩すかしを食ってね。

衛藤：なるほど。

荒木：後であれ（インタビュー当時、荒木の手元にあった文書類か）を探ってご覧下さい。「(数語不明)」とも言っとらんですよ。

衛藤：ああそうですか。

荒木：「判を押すまではどこまでも日本が駐留する」と。「駐屯する」と。それで「一個旅団があそこに、当分の間残す」ということで、最後の判がついた。向こうがなかなか引かないやつを、「どこまでも一個旅団を置く」と。「そうしておかにはあ、具合が悪い」と。「遣」の権利だと思っている。国際問題になって、すぐにまた兵出せますか。そこに駐屯しとるときに。そこで「そいつは引き上げちまえ」と。またけんかすると。それから疫病がはやると。五月になると。そこでそれは凱旋でもって引き上げるのではなく、内地において待機すべしと。上海を内地に持ってきます。

衛藤：なるほど。

荒木：駐屯地が四国ですから、行くことがあれば24時間で行けると。それであれば当時、まあ帰還すべしはですね、「内地において待機すべし」と。そんなことがありゃ黙ってどこにも交渉せずに。外務省が交渉してみたんですけど。それでどんどんどん下げちゃったんですよ。まだ談判が済まないうちに。

衛藤：なるほど。

荒木：それで最後に残したのが、憲兵を。最初は百二十何名ですけど、その次何十何名が残って⁶⁰⁾。これが前衛なわけです。足がかりということ。これで情報をしっかり集めると。危ないか、[危なく]ないか。と

いうので、あれはまあ、びしゃっと済んだんです。それは一いつに小畑の計画周到なことで、戦争というものの目的をはっきり把握してますよ。ちゃんばらで武功を立て [るといふ]、金鵄勲章の問題でもなきゃ、武功問題でもない。感情問題でもない。早くこれを収めるにはどうしたっていう、たまたまそれは偶然に当たったかもしれんけど、上陸3日目の停戦ですからね。ちょっと戦史にはないですよ。

衛藤：なるほど。

荒木：この前、七了口というものの観察ですね。

衛藤：ああ、そうですか。

荒木：まず背後から出て。支那兵というものは何だということを考え、戦場の心理は何だと、背後から急に行けば、もう士気が衰えると。出たらすると。出ると戦わずにどんどんどんどん下がったんですよ。下がって、こちらが決めた予定の戦争に、上海まですぐに弾の届かない、一挙に出てこれられない、25マイルですか、その距離は確か25キロでしたかな⁶¹⁾。一日行程ですよ。おいそれって出てきて、上海到達する分には一日予定があれば、こっちは準備ができると。弾が飛んでこない。友船以外に向こういけば、もうすぐ済まそうと。だから慌ててガンガンガン。向こう（中国側）下がっちゃったでしょ。

衛藤：ああ、そうですか。

荒木：その戦果 [で]、向こう下がったから、「どうだいやめようじゃないかい」と、向こう慌ててるんですから。「ああもう結構結構」と思って。こっちは3日に提案をして、向こうは4日に [手を?] 挙げて。それで戦は済んだんです。こういう点を小畑の功績、小畑の思想関係というようなものは、世間に。小畑はそういうことは大嫌いという、私がそういうところで話しても、「七了口の話人を人に言うのやめてください」というくらいですからね。

衛藤：ああ、そうですか。

荒木：そういうような人は、まあ世間の一つの、何ですかね、参考として知っておくべきなんじゃ。イメージは基本的に恬淡です。

衛藤：そうですか。

荒木：勲章の「く」なんかも言ったことない。あのときも小畑がちょうど、私が [参謀本部第一] 部長だった、小畑が [参謀本部作戦] 課長で

おったんですが。済南事件ね。このときも陸軍省ではもう済南事件というんで、あれがその他も論功行賞ギャーギャーギャー騒いだもんです。上の方の手合いが。ところが我々作戦部でしょ。作戦部がもう主ですから、「あれだけの小さな問題、断じていけない」と。とうとうだからあのときは、陸軍省本省と上の方、一つの論功行賞を受けてません。

衛藤：そうですね。

荒木：下の者、第一線で戦った者、これは別です。そういうのも小畑の性格をよく表している。だから陣頭に立って、経理部とかなんとか、まああいつらはみんな恩典に浴しますからね。陸軍省の各局は。もう一切[恩典に浴している]。それであれを決定したのは宇垣さんのときです。次の宇垣大臣のときに決定した。

衛藤：ああ、そうですね。

荒木：宇垣さんとしては何の関係もないから、気が抜きやすく、[論功を]やらないことに決定したんです。これはでも小畑の一つの性格の表れ、実績ですね⁶²⁾。

衛藤：ああ、そうですね。そういう人だから、三月事件後、十月事件に対しても、非常にあれなんです。

荒木：そういうことです。強烈だったでしょ。「三月事件、十月事件に関係する者は一切用いるべからず」ですからね。

衛藤：ああ、そうですね。

荒木：今でもよく出ますよ。評論家でもね。何でも「あのとき徹底的にやらなかったことが、私の大臣のときになんてできない」、「やらなかったからこんなことになってきたんだ」と。「二・二六事件ができたんだ」と、こう言うやつ。私はというと、別の頭を持っているんです。これはどういう戦になるか分からんと。

衛藤：満洲事変の。

荒木：満洲事変の結果がね。世界戦争だと。そのときにはね、猫の手でも借りたいときでしょう。こういう人（三月事件、十月事件の関係者）は戦場において役に立つ人はたくさんおるんです。我々は陸軍省、参謀本部、順繰りしますからね。三月事件や[十月事件]、そこで幸い何ともしない（クーデターは未遂に終わった）んだが、軍の威信の上もあるだろうし、「これらの人を温存すべし」と。で、私が優柔不断と後に言わ

れるのが、こういう人事に対して「荒木は優柔不断なり」というんですよ。「優柔不断で良い。生ぬるいのが日本の国体だ」というのが、私の主張なんです。「故に天壤無窮なんだ」と。「これをあんまり甘くしたり辛くしたら、それですぐにだめになるんだ」と。まあ、私は自分ではそう理屈を付けてね、「生ぬるいんだ」と。で、「これらの人間も温存しなきゃいけない」と。いったん在郷して呼び出したら、もう能力が、軍内部におけるところの士気がですね、力というものが、ぐんと下がってきます。

衛藤：ああ、そうですね。

荒木：召集されたらもう、下の者はなかなか。「なんでい出てきやがって」ということですからね。

衛藤：なるほど。

荒木：だから同じ能力の、10の能力の者がいったん辞めて、同じ人間 [が] 出てきても、3日でも4日でも辞めて出てくりゃ、まあ引きの効き目しかないから、ひどいときは5 [の能力] しかないですからね。

衛藤：なるほどね。

荒木：それだから「ずっと温存して良いじゃないか」と。「こっちは心得てやれば良いんだ」と。再びそういうことをしないようにということにしたんだけど、まあ我々はよく攻撃を受けるんですよ。

(録音終了か、以下不明)

参考文献

辞典類

岩波書店辞典編集部『岩波 世界人名大辞典』岩波書店、2013年。

上田正昭・西澤潤一・平山郁夫・三浦朱門監修『日本人名大辞典』講談社、2001年。

国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』吉川弘文館、1979-1997年。

秦郁彦編『日本陸海軍総合辞典』第2版、東京大学出版会、2005年。

秦郁彦編『日本近現代人物履歴辞典』第2版、東京大学出版会、2013年。

福川秀樹編著『日本陸軍将官辞典』芙蓉書房出版、2001年。

伝記・回顧録・研究論文・著作

『東京朝日新聞』。

『東京日日新聞』。

「第六十四回帝国議会衆議院予算委員会議録（速記）第四回」1933年1月28日。

新井勲『日本を震撼させた四日間』文藝春秋，1949年。

有末精三『有末精三回顧録』芙蓉書房出版，1974年。

伊藤隆・佐々木隆「鈴木貞一日記 一昭和九年一」『史学雑誌』第87巻4号，1978年4月。

殖田俊吉「日本パドリオ事件顛末」『文藝春秋』第27巻12号，1949年12月。

宇都宮太郎著，宇都宮太郎関係史料研究会編『日本陸軍とアジア政策 一陸軍大將宇都宮太郎日記一』第1巻，岩波書店，2007年。

大谷敬二郎『にくまれ憲兵』日本週報社，1957年。

大谷敬二郎『昭和憲兵史』みすず書房，1966年。

影山好一郎『第一次上海事変の研究 一軍事的勝利から外交破綻の序曲へ一』錦正社，2019年。

北岡伸一『政党から軍部へ 日本の近代5』〈中公文庫〉中央公論新社，2013年。

橘川学『秘録陸軍裏面史 一将軍荒木の七十年一』大和書房，1954年。

橘川学『嵐と闘ふ哲将荒木』荒木貞夫将軍伝記編纂刊行会，1955年。

小磯国昭『葛山鴻爪』小磯国昭自叙伝刊行会，1963年。

佐々木隆「初期「統制派」の形成 一林陸相の進退をめぐって一」『軍事史学』第13巻3号，1977年12月。

杉山元帥伝刊行会編『杉山元帥伝』〈明治百年史叢書〉原書房，1979年。

田中宏巳・影山好一郎監修『昭和六・七年事変海軍戦史』第三巻，緑蔭書房，2001年（原書は1934年）。

ダワー，ジョン著，大窪愿二訳『吉田茂とその時代』上〈中公文庫〉中央公論新社，2014年。

塚瀬進『満洲国』吉川弘文館，1998年。

日本造船学会編『昭和造船史』第1巻（戦前・戦時編），原書房，1977年。

秦郁彦『軍ファシズム運動史』復刻新版，河出書房新社，2012年。

防衛庁防衛研修所戦史室『陸軍航空の軍備と運用〈1〉 一昭和十三年初期まで一』〈戦史叢書〉朝雲新聞社，1971年。

細谷千博『兩大戦間の日本外交』岩波書店，1988年。

堀真清「北・西田派」の民間人グループ 一福井幸・加藤春海・杉田省吾らについて一』『西南学院大学法学論集』第16巻1号，1983年8月。

前田蓮山『床次竹二郎伝』床次竹二郎伝記刊行会，1939年。

松原茂生『陸軍船舶戦争』星雲社，1996年。

宮村三郎『林銑十郎』上〈明治百年史叢書〉原書房、1972年。

校註

- 1) 浅原健三(1897-1967)。大正・昭和時代の労働運動家。1920年2月、八幡製鉄所第一次争議を指導し、治安維持法第17条違反で4か月の刑を受けた。1925年に九州民権党を結成し、1928年の第1回普選では福岡二区で当選、同年末に日本大衆党の中央執行委員となる。1936年1月に社会大衆党を脱し、石原莞爾・林銑十郎らと結び、満洲国協和会の運動に参加。1938年に東京憲兵隊に検挙される。なお、大谷敬二郎によれば、浅原は「昭和十年ころの林陸相当時にあつては、早くもかげの政治幕僚となつていた。〔中略〕林大將は、浅原を絶対的といふほど信頼するようになっていたのである」という。また、林と浅原の關係を受けて、真崎甚三郎は「林は浅原の虜になつている」「林のあとに赤がついている」と口癖のように言っていたという。大谷敬二郎『にくまれ憲兵』日本週報社、1957年、118頁。
- 2) 林内閣成立にあたっては、十河信二、宮崎正義、浅原健三らが中心となって組閣の準備にあたっていた。十河らは板垣征四郎を陸相、末次信正を海相に据えることを計画していたが、梅津美治郎陸軍次官らは板垣の陸相就任に反対し、三長官会議で中村孝太郎(教育総監部本部長)を陸相候補と決定した(海相には米内光政が想定される)。林が中村陸相・米内海相案をいれる決意を固めると、十河、宮崎、浅原らは林内閣から手を引くことになった。
- 3) 閑院宮載仁親王(1865-1945)。1865年9月に伏見宮邦家親王の第16子として生まれ、1872年に閑院宮を継承。1877年に陸軍幼年学校に入校。日清・日露戦争にも出征。1912年11月に大將に就任すると同時に軍事参議官。1931年12月に荒木貞夫が陸軍大臣に就任すると、陸軍部内の抗争が激化したので、それを中和するために参謀総長に任命された。
- 4) 「鈴木貞一日記」によれば、1月20日午前中に林銑十郎は閑院宮のもとを訪れ、陸軍大臣に関して「更迭ノ必要ナシ」と述べた。両者の話し合いの結果、「果シテ辞職ノ必要ナシ」ということになった。この後、荒木、林、柳川平助陸軍次官が会談し、「更ニ殿下ニ荒木大將ノ心中を申出スルコト」になり、その日の午後に柳川が閑院宮を訪問した(58頁、1934年1月20日の条)。鈴木貞一については、註19を参照。
- 5) 柳川平助(1879-1945)。1932年8月から荒木陸相の下で2年間陸軍次官を務める。その後、第一師団長、台湾軍司令官などを歴任。二・二六事件後に予備役編入。

- 6) 閑院宮との会談に同席していた有末精三（陸軍大臣秘書官）の回想によると、林は軍の内情を書いた印刷物を閑院宮に見せ、そのうえで真崎の陸相就任を推薦したが、閑院宮に拒絶されたという。林銑十郎の伝記によれば、その書類の内容は、陸軍部内の勢力を「皇道派」と「統制派」に分け、「皇道派」には荒木、真崎、柳川平助、小畑敏四郎、「統制派」には林、小磯国昭、建川美次、永田鉄山に加え、閑院宮の名が記されていたという。有末精三『有末精三回顧録』芙蓉書房出版、1974年、330頁。宮村三郎『林銑十郎』上〈明治百年史叢書〉原書房、1972年、237頁。
- 7) 「鈴木貞一日記」によれば、1月21日は以下のような経過をたどっていた。午前7時に鈴木が柳川を訪問すると、閑院宮は「真崎ニテハ不安心故林ニスヘシ」と述べたが、林は陸相就任を拒絶し、柳川が改めて真崎を推挙しても閑院宮はそれを聞かなかったという情報が柳川からもたらされた。これを受けて、鈴木は林陸相・真崎教育総監を実現することを第一案とし、それを荒木に伝えた。荒木は鈴木の場合に同意するとともに、「真崎ヲ総監ニモ据ユルコトニ総長殿下反対セハ自分ハ全軍ノ為メ飽ク迄テ踏ミ止マル考ナリ」という決意を告げた。その後、柳川・林が大臣を訪問し、林陸相・真崎教育総監という案で閑院宮に諮ることを決した。その日の夜、「殿下モ御同意ナルコトヲ承知」したという（59～60頁、1934年1月21日の条）。
- 8) 中島久万吉（1873-1960）。明治から昭和時代までの実業家。1932年に斎藤実内閣の商工大臣となったが、1933年に政党連合運動の仲介役を務めたために右翼や軍部からの反発を買う。中島は俳句同人雑誌『倦鳥』（第13巻3号、1925年3月）に「余は偽りならず平素最も尊氏の人物に傾倒して居る者である」と述べる文章を寄稿していたが、それが雑誌『現代』（第15巻2号、1934年2月）に再掲された。1934年2月の貴族院では、「逆賊」足利尊氏を賛美したとして、中島は菊池武夫らから追及を受け、2月9日に商工相を辞任した。
- 9) 鳩山一郎（1883-1959）。1916年、衆議院議員に初当選し、立憲政友会に所属。1931年、犬養内閣の文部大臣、斎藤内閣にも留任。1934年2月には、政友会鈴木派に打撃を与えようとする久原派の策動により、樺太工業株式会社の瀆職事件に関与したとして、鳩山は衆議院と貴族院で追及を受け、3月3日に文相を辞任した。戦後は日本自由党を結成して総裁となり、公職追放を経て、日本民主党を結成し、1954年12月に内閣総理大臣に就任する。1955年11月に自由民主党が結成されると、翌56年4月に初代総裁に就任した。
- 10) 1933年5月、台湾銀行は帝国人造絹糸株式会社（帝人）の株式10万株を売却したが、この売買に背任、贈収賄の疑惑があるとして、1934

年2月から検察当局による捜査が開始された。関係者の検挙が相次ぐなか、三土忠蔵蔵相や中島久万吉前商相への波及も必至となり、斎藤内閣は7月3日に総辞職した。中島は7月21日に、三土は9月13日に収容されている。なお、1937年12月に下された判決では、16被告全員が無罪となり、藤井五一郎裁判長は記者団に対し「全く犯罪の事実が存在しない」と語っている。

- 11) 1934年3月5日、衆議院議員の岡本一巳（政友会を除名）が、1929年8月に小山松吉（当時、検事総長）が共産党関係被告から饗応を受けたことを告発する「怪文書」を配布し、7日には自ら憲兵隊へ告発を行った。小山松吉は即座にこの疑惑を否定する。そして、検察の捜査で、実際に饗応を受けたのは弁護士小山起三ということになった。ところが、実際に饗応が行われたとされる赤坂の待合の女将お鯉は、饗応を受けていたのは小山松吉で間違いないと証言する。結局、岡本の告発とお鯉の証言は誤りということになり、岡本は誣告及び偽証教唆、お鯉は偽証で収監され、最終的に両者とも有罪となった。
- 12) 小山松吉（1869-1948）。明治から昭和時代にかけての司法官。1918年に大審院検事となり、1924年1月には検事総長に就任し、1932年5月まで在任。5月25日に斎藤内閣の司法大臣に就任。
- 13) 永田鉄山（1884-1935）。1932年4月、参謀本部第二部長に就任。次第に林銑十郎へと接近し、1934年1月に林が陸相に就任すると、3月には永田も軍務局長に就任した。林と永田は宇垣系とも連携して皇道派を要職から追い、1935年7月には真崎甚三郎を教育総監から罷免した。8月12日、永田は相沢三郎に刺殺される。
- 14) 1935年7月、林陸相と永田軍務局長の主導により、真崎甚三郎が教育総監から更迭させられた。皇道派は、三長官の人事は三長官の合議で決めるという申し合わせに反するとして、この措置を激しく批判した。
- 15) 1934年4月、実弟白上祐吉前東京市助役に懲役8か月の求刑があったことの道義的責任をとって、林銑十郎が陸相を辞任しようとしたときのことか。このとき荒木の陸相復帰を目指す策動があったようだが、荒木自身は陸相復帰に否定的であった。結局、林は陸相に留任することとなった。
- 16) 床次竹二郎（1866-1935）。1913年に立憲政友会に入会すると、翌1914年に鹿児島県から衆議院の補欠選挙に出馬して当選する。1931年12月に犬養内閣の鉄道大臣に就任。五・一五事件で犬養が暗殺された後、政友会の後継総裁の座をめぐり鈴木喜三郎と争い、敗北する。1934年7月に岡田啓介内閣が成立すると、床次は政友会の反対を押し切って、通

- 信大臣として入閣し、政友会から除名された。
- 17) 1929年、鶴岡和文（衆議院議員）が赤塚正助（衆議院議員、元奉天総領事）のあっせんを経て、張学良から50万円を借り入れたが、この50万円が床次のもとに渡っているという疑惑が生じた。1935年1月25日、衆議院本会議において山口義一（政友会幹事長）がこの疑惑を追及したが、床次はこれを否定する。議会での疑惑の追及は3月には終わった。
 - 18) いわゆる陸軍パンフレット問題のこと。1934年10月1日、陸軍省新聞班は、池田純久らが執筆した『国防の本義と其強化の提唱』を林陸相・永田軍務局長のもとで発行した。これは、総力戦・国家総動員の急務を説き、経済の統制化をはじめとする施策を提案するものであった。議会では、この文書が軍人の政治関与であるとして、既成政党が追及を行ったが、林陸相は実行を強いるものではないとしている。
 - 19) 鈴木貞一（1888-1989）。1931年1月、軍務局勤務。12月に荒木が犬養内閣の陸相に就任すると、荒木の側近として活動するが、次第に統制派寄りになっていく。1933年8月に新聞班長に就任。
 - 20) 1934年11月20日、皇道派青年将校の村中孝次、磯部浅一、片岡太郎が、クーデター企図の容疑で、士官候補生5名とともに検挙され、取り調べを受けた。これは、辻政信（陸軍士官学校生徒隊中隊長）が、一生徒を使い偵知した情報に基づき、片倉衷（参謀本部員）とともに橋本虎之助陸軍次官へ直訴して生じたものであり、士官学校を管轄する真崎崑三郎教育総監らに無断でなされたものであった。1935年3月、軍法会議は証拠不十分として不起訴を決定したが、将校たちは停職、士官候補生たちは退学の行政処分を受けた。
 - 21) 辻政信（1902-?）。1931年、陸大卒業。1932年、上海事変に出征し、戦傷を負う。同年、参謀本部付勤務。1934年8月、陸軍士官学校生徒隊中隊長。この年の11月、士官学校事件に関与。
 - 22) 士官学校事件で投獄されていた村中孝次と磯部浅一は、獄中から誣告罪で辻政信らを告訴していたが、上申しても審理が進展しなかったため、1935年7月に統制派を非難するパンフレット『肅軍に関する意見書』を頒布した。両者は8月に免官される。なお、村中と磯部は二・二六事件に加わっている。
 - 23) 相沢三郎（1889-1936）。1929、30年ごろから、皇道派の将校として昭和維新運動に邁進する。1931年には十月事件にも参加。1935年8月12日、永田鉄山を刺殺し、翌1936年7月3日に銃殺刑に処せられた。
 - 24) 第一師団（1934年8月から1935年12月まで柳川平助が師団長）には、要注意とされていた青年将校が多く、青年将校らは満洲へ移駐すればもう事を起こせないと考え、蹶起を決意した。

- 25) 安藤輝三 (1905-1936)。二・二六事件のとき第三連隊の中隊長。鈴木貫太郎侍従長を襲撃し、重傷を負わず。1936年7月12日に銃殺刑に処せられる。
- 26) 新井勲 (1911-1986)。1931年7月、陸軍士官学校卒業。1931年10月、歩兵第3連隊付。二・二六事件に関与し、1936年7月に禁固6年の判決を受け、失官。1939年10月に仮釈放。戦後、『日本を震撼させた四日間』(文藝春秋, 1949年)を著す。
- 27) 橋川学『嵐と闘ふ哲将荒木』(荒木貞夫將軍伝記編纂刊行会, 1955年)によると、1935年4月に来日した溥儀が荒木に対し、「自分は出来得れば今後北京へ行きたいと思うが之れは如何なものだろう。云う迄もなく、その際は満洲などは他の人に委しても良いと考えている」と語り、荒木は失望したという(389頁)。
- 28) 梅津美治郎(1882-1949)。1934年3月に支那駐屯軍司令官に就任すると、1935年6月には「梅津・何応欽協定」を成立させ、華北分離工作を進めた。その後、第二師団長、陸軍次官、第一軍司令官を歴任し、1939年9月から約5年、関東軍司令官を務める。1944年7月に参謀総長に就任し、そのまま終戦を迎えた。
- 29) 1941年12月8日から1945年8月14日まで行われた戦争。今日では一般的に、太平洋戦争ないしアジア・太平洋戦争と呼ばれるが、荒木自身は戦後も「大東亜戦争」という呼称を用いている。
- 30) 1942年3月時点で、満洲国を承認していた国家は、日本(1932年9月に承認)とポーランド(1938年10月に承認、1939年9月に消滅)を除いて13か国となる。具体的には、エルサルヴァドル、ローマ教皇庁、イタリア、スペイン、ドイツ、ハンガリー、スロバキア、中華民国(汪兆銘政権)、ルーマニア、ブルガリア、フィンランド、クロアチア、デンマークである。この後、アジア・太平洋戦争中に日本が勢力下に置いた、タイ、ビルマ、フィリピンが満洲国を承認している。塚瀬進『満洲国』吉川弘文館、1998年、152頁。
- 31) 1934年9月、イギリス産業連盟前会長のバンビー卿を団長とする使節団が来日し、満洲市場での日英協調の具体案を提示したことを指しているか。このイギリス産業連盟使節団に同行していたエドワーズは、このとき荒木とも会談をしている。
- 32) 宇都宮太郎(1861-1922)。1885年、陸軍士官学校卒業。1908年に参謀本部第二部長。その後、第七師団長、第四師団長を経て、1918年に朝鮮軍司令官。1920年に軍事参議官。軍部内の佐賀閥の指導者と見られており、荒木貞夫や真崎甚三郎とも密接な関係にあった。

- 33) 金応善（1881-1932）。1931年4月、陸軍少将。『東京日日新聞』（1922年2月14日朝刊）には、宇都宮太郎との関係が以下のように述べられている。宇都宮が「有望な朝鮮少年を世話して見たい」と思っていたところ、斎藤力三郎大尉が朝鮮の特務機関で給仕として忠実に働いていた金応善を宇都宮の下へ連れて行った。1896年から宇都宮は金を自宅で養育することとし、金は宇都宮金吾という名を持つに至った。その後、金は赤坂仲ノ町小学校、成城学校、陸軍士官学校を経て、軍人となる。1920年には李王世子付武官となる。
- 34) 李垠（1897-1970）。大韓帝国皇帝高宗の第7王子。1907年に純宗の皇太子となり、日本へと留学した。韓国併合により韓国皇帝一族が王公族として扱われると、李垠は王世子に冊立された。李垠は陸軍士官学校で学んだ後、陸軍少尉に任官し、終戦まで日本の陸軍将校を務めた。純宗没後、李王の位を継承して昌徳宮李王垠となった。
- 35) 荒木と宇都宮太郎とのやり取りは、橋川学『秘録陸軍裏面史 一将軍荒木の七十年一』（大和書房、1954年）のなかで、次のように記されている。1911年に韓国併合の報をロシアで聞いた荒木は、宇都宮に書簡を送り、「東亜の民族が西欧民族によつてかき廻されぬ様にするこそこそ日本の使命と云ふのに何故に日韓合邦せるや」と尋ねた。すると、宇都宮は「御説の通りであるが、寺内が主としてその実現にあつたもので、今更致し方もあるまい。この上は日支親善、その領土の保全に万全を期すべきである」と返信したという（241～242頁）。
- 36) 前掲『嵐と闘ふ哲将荒木』では、以下のように述べられている（226～227頁）。

また議會では満洲国の承認後に於ける事件費の計上に関し、その質問に答えて

“満洲国は謂わば幼い弟である。今や日本はこれを一人前に育て上げる世界的な使命を負っているのである、このため物心の犠牲は当然であり、かくてこそ世界に於ける日本の価値が高められるのである。

今、仮りに兄弟二人揃つて登山しているとして、急に寒くなつて来た（出費）場合、兄は弟の衣類を剥いても、自ら着るであろうか？

むしろ逆に自分の着物を脱いでも幼い弟に着せてやるのではなからうか。この美しい思いやりがあつてこそ、弟が兄に対し心からの信頼を寄せるのである”

と述べて、建国早々の満洲国より早くも何ものか求めんとする心を厳に戒めるところがあつた。

なお、満洲国を「弟」にたとえて、満洲国への支出を容認するような荒木の発言は、帝国議會の會議録には見当たらなかつた。ただ、1933

年1月28日に開催された第64回帝国議会衆議院予算委員会では、満洲国の治安維持に対する日本の財政的負担に関して議論が及び、荒木が「東洋一般ノ平和ノ上カラ考ヘテ見マスト、日本ガ多少身ニ痛ミラ感ジテモ、東洋平和ノ上カラ満洲国ノ為ニ尽シテヤラナケレバナラス」と述べることはあった。「第六十四回帝国議会衆議院予算委員会議録(速記)第四回」1933年1月28日、25頁。

- 37) 1944年7月の東条内閣崩壊前後から、翼賛政治会内部で改組論や新党樹立論が横行したのを受けて、1945年3月30日に大政翼賛会を解散して大日本政治会が結成された。
- 38) 1945年4月15日、いわゆる「近衛上奏文」の起草に関わったとして、吉田茂は殖田俊吉、岩淵辰雄とともに憲兵隊に逮捕され、45日間拘留された。「近衛上奏文」とは、1945年2月14日の近衛文麿による上奏のことであり、軍の統制派が共産革命を達成しようとしているため、一日も早く戦争を終結し、軍統制派を一掃することを訴えたものである。
- 39) 殖田俊吉(1890-1960)。1914年、東京帝国大学法科大学政治学科を卒業し、大蔵省に入省。1927年、田中義一内閣の下で内閣総理大臣秘書官兼大蔵事務官を務める。拓務省殖産局長、台湾総督府殖産局長を経て、1933年8月に関東庁財務局長に就任するも、同年9月に辞職。その後は、藤田組監査役や塩水港精糖会社監査役を務める。アジア・太平洋戦争開戦後は、吉田茂、小畑敏四郎、岩淵辰雄らと終戦工作を画策。1945年4月15日、「近衛上奏文」の作成に関与したとして逮捕される。
- 40) 岩淵辰雄(1892-1975)。1914年に読売新聞入社。1919年に国民新聞に移り、1923年に同政治部次長を務める。1925年に東京日日新聞政治部に移り、1927年から1930年まで同仙台支局長を務める。殖田俊吉と同様に終戦工作に関与し、1945年4月15日に逮捕される。
- 41) 殖田俊吉は陸軍統制派や革新官僚が日本の共産化を企図していると考えており、日満財政経済研究会で作成された「生産力拡充計画」をその種本と見做していた。
- 42) 小畑敏四郎(1885-1947)。1932年2月、参謀本部第二(作戦)課長に就任、同年4月に参謀本部第三部長となる。対ソ早期開戦論を主張し、永田鉄山第二部長と対立。1935年に陸大校長。二・二六事件後、予備役に編入。
- 43) 杉山元(1880-1945)。1910年に参謀本部で勤務すると、1912年に海軍軍令部部員とともにフィリピンの偵察に出張。このとき商人に変装し、フィリピン各地を旅行した。1923年に軍事課長に就任すると、それ以降、軍務局長、陸軍次官、航空本部長、参謀次長、教育総監、陸軍大臣、参

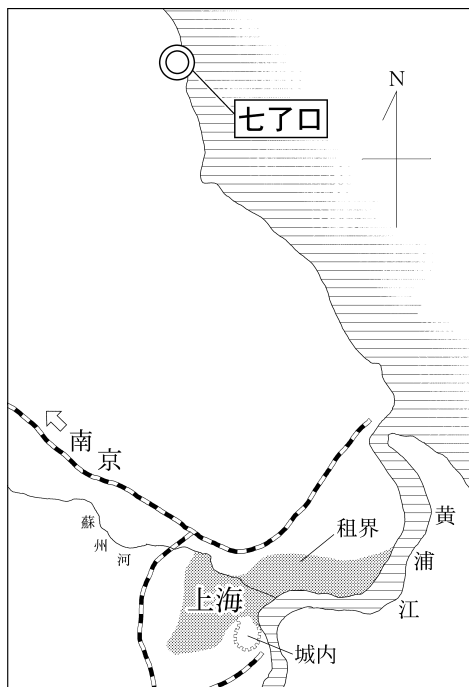
謀総長といった陸軍中央部の要職を歴任。

- 44) 古荘幹郎（1882-1940）。1932年2月に参謀本部第一部長に就任。1934年8月に第十一師団長に就任すると、その後、陸軍次官、航空本部長、台湾軍司令官などを歴任。
- 45) 神州丸は、遠隔の地に上陸作戦を行う目的のために、特別に陸軍が海軍の援助の下に建造した船。上海事変を機に、上陸作戦を行う高性能の専用船を建造することになり、1932年末に海軍に建造のあつせんを依頼。1934年12月末に完成した。飛行機搭載能力を有していたが、陸軍の上陸作戦で使用されることになった。
- 46) 1933年8月に制式が決定された九二式重爆撃機のこと。防衛庁防衛研修所戦史室『陸軍航空の軍備と運用〈1〉—昭和十三年初期まで—』〈戦史叢書〉（朝雲新聞社、1971年）によれば、「昭和三年初め井上幾太郎航空本部長は、小磯国昭総務部長の意見具申に基づき、台湾からマニラ付近を攻撃できる超重爆撃機の研究を發議した」（320頁）。また、九二式重爆撃機の研究は「特に参謀本部の要求に基づき「極秘扱い」とし、同機を「特殊試験機」と称呼した」（365頁）という。小磯自身も回想録のなかで、「台湾を基地としてマニラとの間を往復し、尚マニラ上空に於いて三十分内外活動し得るやうな性能を有する飛行機が得られるれば、蘇聯や支那に対する爆撃機としても優に役に立つだらうと考へ」、外国からライセンスを買って爆撃機を製作してみることを井上航空本部長に提案したという。小磯国昭『葛山鴻爪』小磯国昭自叙伝刊行会、1963年、422頁。なお、小畑敏四郎は1928年時点初頭で参謀本部作戦課長を務めていたが、九二式重爆の発案者であったという証言は他に見当たらない。
- 47) 杉田省吾。二・二六事件時には、満洲国通信社囑託・王朝報特派員。二・二六事件勃発後、西田税、渋川善助らと協力し、「昭和維新情報」の編輯発行、労働組合の奮起を促すなどの活動をした。裁判では叛乱幫助の罪で禁固1年6か月、執行猶予4年の判決が下された。
- 48) 永井柳太郎（1881-1944）。1909年、早稲田大学教授となり、社会政策と植民政策の講座を担当するも、1917年に学内騒動に巻き込まれ、早大を追われる。1920年、石川県から無所属で衆議院議員に当選し、その後憲政会へ入党、1931年に立憲民政党幹事長となる。1932年5月、斎藤実内閣の拓務大臣、1937年6月、第一次近衛文麿内閣の通信大臣を務める。
- 49) 結城豊太郎（1871-1951）。1904年に日本銀行に入り、1919年に理事に就任。1921年には安田保善社に入り専務理事、安田銀行副頭取となる。1930年に日本興業銀行総裁。1937年2月に林銑十郎内閣の大蔵大臣に

- 就任。同年7月には日本銀行総裁となって、1944年3月まで在職する。
- 50) 河原田稼吉(1886-1955)。1909年に内務省に入り、1931年の犬養毅内閣のときに内務次官に就任。近衛文磨と密接な関係を有し、1937年に林銑十郎内閣の内務大臣に就任した。その後、貴族院議員に勅選される。
 - 51) 塩野季彦(1880-1949)。1906年、東京帝国大学法科大学独法科を卒業後、司法界に入り、検事を務める。その後、平沼喜一郎の知遇を受け、平沼が主宰する国本社・修養団にも加わり、平沼派の中心人物と目された。1937年の林銑十郎内閣で司法大臣として入閣し、第一次近衛内閣でも留任した。
 - 52) 十河信二(1884-1981)。1909年、東京帝国大学法科大学政治学科を卒業し、鉄道員に入る。1930年7月から1934年7月まで南満洲鉄道株式会社理事、1935年から1938年まで興中公司社長を務める。
 - 53) 遠藤柳作(1886-1963)。1910年、内務省に入り、青森、愛知の各県知事などを歴任する。1933年、満洲国総務庁長に就任。1939年、阿部信行内閣の書記官長に就任。
 - 54) ここで荒木が想定しているのはおそらく石渡莊太郎(米内光政内閣で書記官長)だが、実際に十河・浅原とともに林内閣の組閣に携わったのは宮崎正義。石渡は林内閣成立時に大蔵省主税局長に就任している。ここで荒木は勘違いをしていると推測できる。宮崎正義(1893-1954)。1911年にハルビンに留学し、1914年には満鉄ロシア留学生としてモスクワに留学。1917年にペテルブルグ大学を卒業し、満鉄入社。1923年には満鉄調査課ロシア係主任に就任。1933年に東京在勤。1935年、石原莞爾の指示により、日滿財政経済研究会を主宰。
 - 55) 1938年12月に浅原健三は、日本で一国一党の革命政党的樹立を企図しているとして、憲兵隊から検挙された。このとき、石原莞爾ら満洲建国に関わった将校の共犯も疑われていたが、石原らを検挙すれば、その同志的關係にある板垣征四郎陸相にまで影響が及ぶと考えられた。結局、石原は検挙されず、浅原も釈放され、上海に移ることになった。
 - 56) 今村均(1886-1968)。1931年8月、参謀本部作戦課長に就任。1932年2月に参謀本部付となり、上海へ派遣される。
 - 57) 白川義則(1868-1932)。1927年4月、田中義一内閣の陸軍大臣に就任するが、張作霖爆殺事件では河本大作を処罰できず、内閣総辞職の原因をつくる。1929年に軍事参議官となるも、1932年2月に上海派遣軍司令官に起用され、第一次上海事変に出征、上海の占領を終えると直ちに停戦を実現した。停戦後の4月29日に上海虹口公園で開かれた天長節の祝賀会で、朝鮮人尹奉吉の投じた爆弾で重傷を負い、5月26日に死

去した。

- 58) 1932年3月1日、第十一師団が揚子江沿岸の七了口に上陸し、戦闘の末に中国軍を退却させた。



「上海事変経過図（其ノ三）」（第三艦隊司令部『上海事変記念帖 昭和七年』，1932年）等より作成。

- 59) 野村吉三郎（1877-1964）。1898年、海軍兵学校を卒業。第一次上海事変勃発に際して、1932年2月、第三艦隊司令長官となり、4月29日の上海における天長節祝賀会で、爆弾事件に遭い、重傷を負い、右目を失った。
- 60) 前掲『嵐と闘ふ哲将荒木』には、憲兵120名を残して撤兵したとされている。一方、軍令部が作成した『昭和六・七年事変海軍戦史』戦紀巻三によれば、上海に残留することになった憲兵は約90名となっている。
- 61) 1932年3月3日の総攻撃により中国軍は20キロメートル以遠に退却した。
- 62) 前掲『嵐と闘ふ哲将荒木』によれば、済南事件の論功行賞が問題となり、「軍人の論功稼ぎ」が批判されたのを受けて、「[荒木] 将軍はかゝる世

論に先んじて、現地軍が兎も角として、その他の直接戦闘に関係なき筋の行賞は不必要なりと強く主張し、また現に連日徹宵で作戦の事に当つた責任の衝にある第一部では、小畑課長始め一同が、何れも卒先して中央部の行賞は不要との態度を明としたのであつた」という(97頁)。なお、『東京朝日新聞』(1929年4月13日朝刊)によれば、当初陸軍が提出した論功行賞案は「余程濫賞の嫌ひがある」ために、内閣が陸軍側に再調査を要求するという経緯があつた。